
ミノタウルス

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミノタウルス

【Nコード】

N5035Y

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

八人は気がつくと殺風景な部屋にいた。彼らは何故こんなところに連れて来られたのか疑問を持つ。やがて、ここが地下迷宮だということがわかる。彼らはここから抜け出そうとするが、なかなか上手いかない。そんな中、八人の一人が迷宮の中に怪物が出たと言
い始める……

登場人物紹介

拉致された八人の男女

田辺義男

迷宮に連れてこられた二十一歳の男

加藤春人

迷宮に連れてこられた男。六十三歳。

野々宮沙智子

迷宮に連れてこられた十八歳の少女

横井勉

迷宮に連れてこられた男。二十五歳

富士野満雄

迷宮に連れてこられた男。勉とは親友同士。二

十五歳。

水野瑠美子

迷宮に連れてこられた女。二十五歳。

西岡

迷宮に連れてこられた女。六十一歳。

沢登

迷宮に連れてこられた男。三十七歳。

管理人

正体不明。彼らを監視している節があるが……。

ミノタウルス

正体不明。規則を破ると、やってくるらしい。

何を

されるのかもわからない。

ここはどこだろう、田辺義男は考えた。俺はこんなところで何をしているだろう。

殺風景な部屋に義男はいた。ベッドに、義男は横になっていたよ
づあ。

義男はベットから起きた。薄い青色の壁に手をやってみる。ざらざらした手触り。まだ真新しい。辺りを見回す。小さな部屋に、ベットと机それに机の上にパソコンのモニターと隣にパソコン本体が置いてある。壁には時計があり、時刻は午前九時五分。それに扉がある。義男は何も考えずに扉を開けた。扉は開き、その向こうには壁が見えた。左右にはどこまで続いているのかわからない通路が奥まで続いていた。義男は扉を閉めた。

わけがわからなかった。気づいたら、ここにいて、その前後の記憶がない。義男は最近の出来事を思い出してみた。仕事にいき、帰り、仕事に行き、帰る。特別変わりようがない。一体誰が俺をこんなわけのわからないところに連れ込んだんだ？ 義男はパソコンを見た。もしかしたらこの中に、何かヒントがあるかもしれない。当然のように義男はそう考えた。義男は椅子に腰掛け、パソコンの電源を入れた。モニターが光り、ウィンドウズが立ち上がった。しかし義男にはこの先どうしていいのかわからなかった。どこを見ればいいのだろうか、さっぱりだった。義男は電源を消した。

とにかく外に出よう、と彼は考えた。この建物の中から出るのだ。彼は扉を開けて通路に出た。通路は明るい。天井に明かりがついている。考えてみれば今いた部屋にも電気がついていた。今は夜なのだろうか、窓がないからよくわからない。彼は歩いた。通路を進む。左手に扉が見えた。義男は早速その扉の中に入った。

扉の中は先ほど義男が目覚めたときにいた部屋に似ていた。とい

うよりもそっくりだった。違うのは部屋の真ん中に少女が立っているということだけだ。少女は義男が入ってきても格別驚いた顔をしなかった。黒髪の少女。全体的に整った顔をしていて、清楚な雰囲気があった。化粧はしていなく、素の顔だったが、白くなめらかな肌は美しかった。

義男は戸惑った。なんと声をかければいいのだろうか？ しかしそんな心配は杞憂に終わった。少女のほうから声をかけてきたのだ。「この人ですか？」少女が聞いてきた。脅えた顔をしている。

「いや、違う。何でここにいいのかわからないんだ。ここどこなんだろう？」義男も聞き返した。

「わかりません。気がついてたらここにいたんです」少女が答える

「それじゃ、俺と同じじゃない」

「そうなんですか」少女の表情は変わらない。

義男は仲間を発見したと思った。この少女も自分と同じく、わけがわからずに気がついてたここにいたという立場。しかし仲間が見つかったからといって、何か変わるわけではない。早くここから出ないと。義男は自分の部屋にもあったパソコンのモニターに目をつけた。

「パソコン、立ち上げてみた？」

「はい。だけどインターネットに接続もできないし、ほとんど何にも使えないみたいなんです」

「そっか……ずっと部屋にいたの？」

少女は部屋の周りを見回した。「目覚めてからは、はい、ずっといたここにいました」

「外に出て一緒にここから出よう」義男は少女を誘った。

「だけど、大丈夫なのかな？」少女が眉間に皺を寄せる。

「何が？」

「ううん、もしかしたら何か理由があってここにいるのかもしれないと思って」

義男は考えてみた。確かにその可能性はあるが、だがこんなとこ

ろにいるよりも彼は一刻も早く家に帰りたかった。

「大丈夫だと思う。もし俺達を部屋から出したいくないならそれを促すような貼紙でも貼っとくはずだよ」

少女は義男の言葉にうなずき、外に出た。長く無機質な通路の様に戸惑っているようだ。二人は歩き始めた。しばらくお互いに口を聞かずに歩いていたが、知らない者同士なのだ、何か話して交友を深めるべきだと義男は考えた。

「名前はなんていうの？」

「野々宮です」少女は予想していた質問だとばかりに即答で答えた。

「野々宮ね、下の名前は？」

「沙智子。なんて名前なんですか？」沙智子が逆に聞いてくる。

「田辺義男」しかしこんな状況で自己紹介か、と義男は自嘲した。

「歳は？」義男が聞いた。

「十八です」少女が答える。

「じゃあ高校三年生？」

「そうです」

「俺は二十三歳なんだ」

「お仕事されているんですね」

「うん。とある中小企業で」

「そうなんですか」

会話は途切れた。義男は仕事のことを考えていた。記憶があった最後の部分が会社から家に帰るところだった。車の中で鼻歌を歌っている自分がある。それから全く記憶がない。今日が何日なのかもわからない。義男は携帯電話があれば、日にちがわかるのにも思った。しかしポケットには何もない。財布すらも。

「ここにはどうやってきたか覚えているかな？」

「全然。気づいたらここにいたんです」

「俺もそう。記憶がぼやけているんだ。なんだかわけがわからない」野々宮沙智子は難しい顔をした。「少しだけ覚えているんですけど、通学途中のことだと思ったんですけど、黒い車が横に近づいて

きたってことだけ覚えているんです」

黒い車。義男は何か奇妙な不安感に襲われた。俺はもしかしたら、誘拐されたのだろうか？　だが目的が見えない。それにここは一体どこなんだ。

二人は右側の壁に扉があることに気づいた。さらに通路に奥にくくと突き当たりにも扉があった。

「どうしよう」沙智子がつぶやいた。

義男は迷うことなく右側にある扉を開けた。扉の先はまた、先ほどの少女の部屋と似たような光景だった。違うといえばベッドに男が眠っていることだろうか。

男は小さな寝息を立てて眠っている。髪は白髪で、顔も手足も皺だらけでかなりの高齢に見えた。黒い、大きめのＴシャツ。下には白のゆったりしたパンツを穿いている。年のわりには若者のような格好だ。一体この老人は何者だろうと二人は考えた。男は全身日に焼けているように色黒だった。

男の寝息が止んだ。それから目がゆっくりと開き、義男たちに向けてられた。

「お前らは何者だ？　私を攫って何の得がある？」男の声は敵意に溢れていた。しかし男は二人を見て、驚きの表情を浮かべた。男は上半身をゆっくりと立たせ、まじまじと義男と沙智子を見つめた。

「あんたら、もしかして俺と同じでここに連れ去られたんじゃないだろうな？」男が聞いてくる。

義男はうなずいた。

「たぶん、そうです。記憶がないからよくわかりませんが」

「あつという間のことだったんだろうな」老人は起き上がった。老人は百七十センチの義男よりほんの少し背が高かった。「さて、君たちは何故この部屋にきたんだ？」

「扉があつたから、入ってみたんです」義男は素直に答えた。

「なるほど。連中はここにいいのか？」

義男には連中というのがわからなかった。

「思い出した」沙智子が突然言った。「黒い車に乗った男達。黒ずくめのスーツを着ていたあの男達。こつちを捕まえようとするから、抵抗したけど、捕まって、それから……」

義男は黒ずくめのスーツというのに反応した。そして義男も全てを思い出した。

仕事帰り、家まで近道の峠道を走っているとき、一台の車に追い抜かれた。車は目の前で止まった。何か自分に用だろうか、と考えた義男は不安になりながらも車を停止させる。前方の車の中から何人かの男達が出てきた。黒ずくめのスーツを着た。義男は男達に捕まり、口には何かを当てられ……。

「思い出した。やっぱり誘拐されたんだ！」義男が叫ぶ。

「そうだ、私達は誘拐された。だけど何のためにかな？」老人はそういつて扉を開けて通路に出た。二人も続いた。

「私の名前は加藤。よろしく。二人の名前は？」

二人はそれぞれ自分の名前を言った。

「さ、いこう」老人は言ったが、老人は義男たちが歩いてきた道を引き返そうとするので慌てて止めた。老人は笑った。

「俺にはここがどうなっているのかさっぱりだ。先導を頼む」

義男とて似たようなものだったが、とにかく義男は先頭を歩いた。すぐに突き当たりになり、目の前には扉があるのみだった。

「開けるしかないだろうな」加藤が言う。

義男は扉を開けた。

開けた場所に出た。縦横に広く、真ん中には自動販売機が並んでいる。両端には駅のプラットホームにあるような赤くあまり座り心地のよくなさそうな座席が並んでいた。天井にはモニターが取り付けてあった。

そして広場には三人の男女がいた。

「誰だ？」背の高い、黒いニット帽に青い縁の厚めの眼鏡をかけた

男が言った。その隣にはこれまた体が大きく、少し太り目の男がいた。体をすっぽりと包むクリーム色のパーカーを着ている。ぽつちやりとした顔をしているが、男の目は鋭かった。そして女は黒いワンピースを着ている。露出している肩や腕は細いが、豊かな胸をしていた。三人とも年若い。

「私達はここに強引に連れられてきたものだが、君たちこそ何者だ？」加藤がはつきりとした、凄みのある口調で言った。

「俺達もおんなじさ」黒いニット帽を被った男は明らかにほっとした顔をした。

「他にもまだいるんじゃないでしょうね」ワンピースの女が言う。

「なあ、とりあえずここから出ようぜ。埒明かないだろ」太り目の男が言う。それから男は加藤を見た。「すいません、そっちの扉から出ることでできない？」

「わからない」加藤が答えた。「とりあえずこっちにきてみたが」

義男は奥にある扉を見た。「向こう側はどうなってるんですか？」
「わかんない」女が答えた。「気づいたら小部屋にいて、それで部屋をでて廊下をずっと進んだらここに出ただけど……」

「反対側にはいつてないからな、わからない」太り目の男が言う。

「なら、いつてみようじゃないか」加藤が言う。

「仕方ねえな」帽子の男が立ち上がり、奥の扉を開けようとしたが、開かない。

「どうなってるんだ？」男は無理に取っ手を引っ張ったり、ドンドンと叩いてみるが、扉は全く開かない。「畜生、なんで閉まってんだ？」

義男は振り返った。背後でも似たような音が聞こえた。見ると沙智子が、今自分達が入ってきた扉を開こうと躍起になっていた。

「駄目、こっちも開かない」沙智子が青ざめた顔をして言った。

六人に緊張が走った。義男が考えたのは、今からここに毒ガスが流れる、ということだ。ガスは天井から噴出し、やがて充満する。終わったところには眠ったように横たわる六人の死体があるだろう。

しかし、義男の予想とは全く違うことがおこった。何かの音が聞こえた。六人はすぐにそれが何かわかった。天井にあるモニターの電源が入った。

それで？ 義男は思った。一体どうなるんだ？ 六人はそれぞれモニター画面に目線を合わせた。

モニター画面の中に字が映っている。そこにはこう書かれていた。

ようこそ、地下迷宮へ。ここでは迷路のように入り組んだ通路が全体に広がっています。あなた方八人はこの地下迷宮に住む権利が与えられました。永遠にこの迷宮の暮らしを満喫してください。

尚、もしここの暮らしが気に入らない場合、ここから出ていただいても構いません。ただしここの出口を見つけるのは至難の技です。それに通路にはたまに猛獣や怪物がでます。十分ご注意ください。

食事は各部屋に用意させて頂きます。最初に目覚めた場所がそれぞれの部屋となっております。食事時間は午前七時、昼十二時、夜八時となっております。

各々方が健やかな日々を送ることを願っております

管理人より

「なんだ、これ？」誰もが思ったことを口にしたのはニット帽の男だった。

老人がため息をついた。「どうも、厄介な事に巻き込まれたみたいだな」

「これは何の冗談なの？」黒いワンピースの女がつばやいた。その顔は脅えきっている。

「嘘だろ」太った男は呆然としている。「ここですつと過ごせつて？　ありえねえよ」

義男は沙智子を見た。沙智子も茫然自失といった顔をしてテレビに映る言葉を見ていた。無理もない、これはどう考えても異常すぎる。永遠にこの迷宮の暮らしを満喫してください。永遠にこの迷宮の暮らし。永遠？　ふざけるな……。

ニット帽の男が人数を数えている。彼は数え終わるとまたテレビを見た。「おいおい、今この部屋には六人しかないぞ。あと二人はどこにいるんだ？」

「確かに。テレビでは八人と書いてあったな」加藤が言う。「あと二人、この……地下迷宮とやらのどこかにいるということかな？」

「だけどき、扉が開かないんだぜ、どうしろってんだよ」小太りの男が、もう一度確認してみようと扉のノブを回した。しかし扉はやはり開かない。男は扉を蹴った。

「大丈夫？」義男は側で脅えきった顔をしている沙智子を慰めようと声をかけた。沙智子は青い顔を義男に向け、ゆっくりとうなずいた。全然大丈夫そうじゃないな、義男は思った。「すぐにここから出れると思うよ」何の根拠もなく義男は言った。

「それならいいけど」少女の顔に希望の色は浮かばなかった。義男としてはそれ以上のことは言えなかったのでとりあえず少女のことは放っておくことにした。

「なあ、これからどうすればいいと思う？」加藤が義男に聞いてきた。「私のような老人にはさっぱりだよ」

「俺だって、さっぱりです」義男は答えた。

「うん。だけど、何か手はあるはずだ。ここから抜け出すな」

義男はうなずいた。しかし今はどうしようもない。扉は鉄の扉だ。木の扉じゃない。壊すことはほとんど不可能だ。義男は部屋をうろつき、そして自動販売機に目があった。呑気にジュースなんて飲んでられるか、と思ったが、喉がからからに渴いていた。何時間かはわからないが、今までずっと寝ていたんだ。体が水分を求めているも無理はない。義男は自動販売機に近づいた。自動販売機は八台あり、ジュースだけでなくタバコ、酒まで売っている。義男はペプシコーラを買おうとして、コーラ缶の下に書かれた数字を見た。数字は0だった。義男はそういえば財布を持っていないことに気づいた。義男はそのままボタンを押した。缶が落ちる音がした。義男は手を伸ばしてコーラを手にとった。タブを外して飲む。喉に潤いが与えられた。乾きが収まり、義男はとりあえず満足した。喉の渇きが収まると今度は腹が減ってきた。

「なるほど、タダで手に入るというわけか」加藤が隣で言った。加藤もコーヒーを取り出し、煙草を取った。そしてジーンズのポケットを探り、少し困った顔をした。「誰かライターを持っていないかね」

「ほれよ」太り目の男がライターを加藤に投げた。加藤はライターを受け取り、椅子に座ってコーヒーを一口飲んだ後、椅子に灰皿が置いてあるのを確認し、煙草をうまそうにふかした。「何をとまれ、煙草を吸うことはできるというわけだ」

「おじさん、結構気楽だな」ニット帽の男が笑った。

「じたばたしても始まらんようだしな。お前さん、名前はなんてんだ？」

「俺？ 横井勉。それでこっちは富士野満雄」男はわざわざフルネームで答えた。

「私は加藤だ。下は春人。なんだ、二人は知り合い同士かい？」

「そう、俺と勉は高校からの友人だ」小太りの男、富士野満雄が答えた。

「知り合い同士は俺達だけ？ そのカップルさんたちは？」横井勉が言った。

「俺達だつてさつき会ったばかりですよ、俺は田辺です。それからこっちが野々宮さんです」義男は答えた。

「野々宮沙智子です」沙智子が言う。「私、早く家に帰りたいです」

「それはここに連れ込んできた奴にいつてくれよ」勉が言った。

「お嬢さん、お名前は？」加藤が黒いワンピースの女に聞いた。

「水野瑠美子」女がぶつきらばうにフルネームで答えた。自己紹介なんてしている場合じゃない、といった顔つきだった。

加藤はタバコを吸い終え、灰皿を落とした。彼は目を細め、どこか遠くを見つめるように奥にある大きな扉に目を向けた。

「あれが開けばいいんだがな」彼はつぶやいた。

「あんな馬鹿でかい扉じゃ押しても引いても開かないな」小太りの満雄が扉に気づいたようだった。

「どの扉も閉まっているのにどうしろってんだよ」黒ニット帽の男、横井勉が叫ぶ。「こんなところにずっといられるかよ」

「やめてよ、イライラする」水野瑠美子と名乗った女が勉を一喝した。勉は瑠美子をじろりと睨んだ。

「あんたは平気なのかよ？ こんなところに、閉じ込められてさ」

「平気じゃないけど、わめいたって仕方ないじゃない」

「他にやることが何もないんだよ！」

「だから、イラっとするからやめてっていつてるの」

「わかったよ」勉がそう言つて目を瞑った。

「みんな、不安だろうが、とりあえず何もできん。しばらく様子を見よう。それで何も起きなかったら扉を叩き壊す手段を考えよう」

加藤が言った。

「でも、鉄の扉だぜ？」満雄が言う。

「だから、後で色々と考えてみよう」加藤は言い、それから全員が黙った。加藤の提案どおり、しばらく様子を見るということにしたようだ。義男は沙智子が心配になった。この中では一番気が弱そうな彼女は人形のように大人しくしている。守ってやりたい、と義男は思った。こんな感情が生まれたのはひさしぶりだ。

六人は椅子に腰掛け、時間が過ぎるのを待った。時々、勉と満雄が喋りあう声が聞こえる。義男は眠くなってきたので、沙智子の様子を心配しながらも眠りに船をこぎ始めた。夢の中で彼は暗い夜道を歩いている。その目の前には人が数人こちらに歩いてくる。彼らの進むほうは外灯があり明るかった。そして義男を振りかえり、意味深な目を向ける。なぜそんな顔をするんだらうというところで目が覚めた。

他の五人は眠っているようだ。どうやらいよいよ老人の言うとおり、扉を壊す努力をすべきときなのかもしれない、と義男は考えた。と、義男は沙智子だけが眠っていないことに気づいた。沙智子はじつと目の前を見つめていた。沙智子の目線の先には大きな扉があった。

「ずっと起きてたの？」

義男が尋ねると沙智子がゆっくりと振り返った。

「義男さん、ずっと寝てたね。私は眠る気になんて全然なれなくて」沙智子の目は、こんなときに眠るなんていい根性してるわね、と言っているように聞こえた。

「こんなときでも眠れるものらしいね」義男は軽く笑った。「沙智子ちゃんが見張っててくれてよかった」

沙智子は愛想笑いをした。そして義男に真剣な顔を向けた。細いが、はつきりとした眼だと義男は思った。その目だけで沙智子が必死なのがわかった。何か重要なことを言うつもりだろうか、義男は身構えた。

「あの、トイレって……ないんですかね」

「トイレ？」

「その……はい。トイレにいきたいんです」

義男は戸惑った。確かに、ここには自動販売機と椅子しかない。水分だけは好きなだけ取れるのに、便意を感じたときにそれを排泄できる設備はどこにもないのだ。

「部屋にいけば、あるんだけど、困ったな」

「ごめんなさい。でも、こう時間が経つと」

「いや、沙智子ちゃんだけの問題じゃないよ。まいったな、コーラなんて飲まなければよかった」義男も焦ってきた。尿意を感じたらどうすればいいだろうか？ 見ず知らずの連中に見られながら隅で排尿しろとでもいうのだろうか。

「冗談じゃない」義男は沙智子にも聞こえないほど小さくつぶやいた。

「え？」

「いや、なんでもない。困ったな。まだ我慢できる？」

「少しなら」

「もう少しの辛抱だよ」その根拠はなかった。いざとなったらジュースの缶かビール瓶の中にでもするしかないだろう、と義男は思った。女にとってはかなりの屈辱のはずだ。いや、男だって、少なくとも義男にとっても屈辱だった。しかし、膀胱炎になるよりはましのはずだ。

そのとき、突然扉が勢いよく開き、その音を聞いた義男と沙智子はびっくりして開いた扉を見た。寝ていた四人も飛び起きた。

三

「開いたのか？」驚きの顔をして満雄が言った。

扉から現れたのは小さな男だった。身長百五十数センチ、といったところだろう。男は肩を落とし、背中を少し丸めている。陰気な顔をした男のまるで世の中を全て否定するかのような目がじろりと六人を見廻した。

「お前らは誰だ？」男が言った。低く、特徴的な声だった。「俺をどうしてこんなところに連れてきた？」

男の声は段々と上がっていき、フロア全体に響き渡った。男の目はやたらと大きく、ぎよろぎよろしていて義男は薄気味が悪いと感じた。

「あんた誰だ？」勉が問う。

「とぼけるなよくそつたれ。お前が、お前たちが俺をここまで連れてきたんだろう」男は目を爛々と輝かせて叫ぶ。

「落ち着いて欲しい。我々は君に何もしてはいない。我々も君と同様、何者かにここまで連れてこられたんだ」加藤が静かに言った。

男は疑い深げな目で加藤を睨み、それから全員を睨んだ。義男は男と目があうと慌てて逸らした。この男はすこしおかしい。

「本当か？」男は血走った目を加藤に向けた。見ているだけでぞつとする、思わずしかめ面を浮かべたくなるような目で、事実満雄と勉は彼を不快感露わな顔で見ていた。

しかし加藤はにつこりと笑った。「本当だとも。嘘をつくことはない。そうでなければなぜこんなところにいると思う？ 今だって扉の鍵が開かなくて右往左往していたところだというのに。君のおかげで鍵は開いたようだが」

「ああ、内側から掛かっていたみたいだな」男が言った。そういつた瞬間だけ、男は普通の顔になった。異常者ではない、どこかとはけているが、穏やかな表情。

「助かったよ。ありがとう」加藤が言った。

義男は思った。これはあの老人のマジックだ。さつきまで尋常ではない殺気を放っていた男が急に大人しくなってしまった。あの老人のスマイルは人を落ち着かせるものがあるようだ。本人もそのことを自覚しているに違いない。

男は氣勢を殺がれたようで、次にどういう行動を取っていいのかわからずに戸惑っている様子だった。男が何かを言いかけたそのとき、反対の扉の鍵が外される音がして、扉が静かに開いた。

現れたのは痩せた長身の老婆だ。痩せた、といってもがりがりに痩せこけている、というわけではないが、それでも痩せていることは痩せている。歳は六十を越えている、と義男は予測した。それは誰もが予測できることだった。しかし、義男は奇妙だと思った。彼女の目を見て、美しい、と感じたことに。自分はそんな趣味があったのだろうかと老婆をまじまじと見てみる。老婆は確かに年齢を重ね皮膚は皺だらけだが、その目だけは異様に綺麗だと認めざるを得なかった。

彼女の目を見て七人全員が何かの宝石をイメージした。エメラルド、サファイア、ルビー。どれも色が違うが、美しさは同じだった。実際の彼女の目は薄い茶色だったが、微かに青い部分があるように思えた。瞳の中心に義男はそれを見て取った。灼熱の太陽に照らされ、煌くように輝く海を彼は頭に思い描くことができた。

「あらあら、一体何なの、これは」年老いた女は美しい声だった。だがその声のせいで老婆が怒っている、戸惑っているということが七人には伝わらなかった。「これはどういうこと？ 一体何故こんなことをするの？ あたしが何をしたと」

「おばあさん、落ち着きなよ」満雄が笑みを浮かべて老婆をなだめた。「俺たちもそつちと同じで、ここに連れてこられたんだ」

「俺達だってなんで誘拐されたのか、さっぱりわからない」勉が付け足す。

「だから、あなたも私達のように椅子に座り、自分の身に起きたこ

とても話してくれんかね。そちらの君も」

小柄な男と年老いた女は不安げな顔を浮かべていたが、とにかく椅子に腰掛けた。

「ここにいる全員が誘拐されたというの？」女が聞く。

「そうです。ここにいる全員が、何者かに誘拐された。そしてその実行者たちはまだ姿すら見せていない。上にあるモニターを見て御覧なさい」

女は加藤に言われたままにモニターを見た。小柄の男もそれに倣った。二人とも食い入るように画面を見つめ、それから数秒後、「なんなのこれ？」と女が言い、「なんだこれは？」

と男が言った。

「私達にもさっぱりだ。さて」加藤が立ち上がった。一同の視線が加藤に集まる。「扉も開いたことだし、私は食事を取ることにしようと思う」

「部屋に戻るってことかい？ 最初の場所に」勉が聞く。

「そうだ」

「そんな呑気なことでもいいのかよ。俺達誘拐されて、ここがどこかもわからないんだぞ、つたくとぼけた爺さんだ」満雄が言う。

「不安ではあるが、とにかく腹が減って仕方がないんだ。また扉が閉まったりしては嫌だろう？ 各人、まずは自分達の部屋に戻ってみてはどうか」

加藤は扉を開け、広場を去った。

「あの爺さんの言うことも一理あるかもね」水野瑠美子が言った。

「ここにいるだけでも始まらないみたいだし、あたしもいったん最初に戻った部屋に戻ってみる」

瑠美子が去ると勉と満雄が二人で相談しあい、「俺達もそうするか」といつて去っていった。

「俺達も戻ろう」義男が沙智子に言った。なんとなく、残されたメンバーが嫌だったので義男は早くここを去りたかった。老いた女のほうはまともそうだったが、小柄な男はなんとなく怖かった。見た

目はただのチビだが、妙な迫力があつた。狂気を感じる。

「はい」沙智子は逆らわなかった。二人は広場を去る。扉を閉める前に老いた女が「なんだかさっぱり」とつぶやくのを義男は耳にした。扉を閉め、義男は通路を進んだ。

四

沙智子と別れて、義男は目覚めたときにいた部屋に戻った。部屋は先ほどと全く変わっていない。あれから四時間ほど経っただろうか、義男は時計を見た。時刻は午後一時を回っていた。義男はベツトに座り、大きなため息をついた。これからどうなるのだろうか、果たしてここから出て外の世界に帰ることができるのだろうか、そんな心配ばかりが頭をよぎる。かなり腹が空いていたが、はてさて、食事はどうすればいいのだろう。部屋に食事を用意するとモニター画面に書いてあったのだが。

それから義男の考えを読んだように、壁の一部が突き出された。義男は驚いて近づいてみた。引き出し状のものが壁から飛び出て、その中には弁当が用意されていた。水色のプラスチックの容器が二つ。そしてその前に割り箸が置いてある。義男は早速それらを取り、机に置いて容器の蓋を開けた。梅干が真ん中に載った白米、ハンバーグにゆで卵、それからサラダが盛り付けられたおかず。義男はそれらを食し、全て食べ終わると腹は満杯になった。満足だった。義男は容器と割り箸を引き出しに入れた。引き出しがゆっくりと閉じていく。重りに反応したのか、この部屋が監視されているのか、義男はそんなことを考えた。

さて、これからどうするか？ 義男は思った。もう十分食べたし、十分寝た。となれば、娯楽の時間だ。しかし、部屋の中にはパソコンとそれに机、ベツトしかないのだ。テレビくらいあってもよさそうなものだが。広場にいけばテレビは見れるが、果たしてあの老婆と小柄な男はどうしているだろうか。

義男はふと、机の引き出しを開けてみるということをしていないということに気づいた。引き出しは四段あり、一番上には鍵穴がついている。義男は一番上の引き出しを開けてみようとした。開かない。どうしても開かない。まあ、いいや。義男はそれを放っておく

ことにした。その下の引き出しを開けると、そこには携帯ゲームがあった。今流行りのゲーム機だ。

「ゲームなんて全然してないな」彼はそうつぶやいてゲーム機を手にとってみた。ソフトは何だろうと取り出してみると義男好みのものだった。義男はにやりとした。なるほど、退屈しのぎにはなるわけだ。義男は携帯ゲーム機をしまった。それから三段目の引き出しを開けてみた。

三段目の引き出しには小説が入っていた。義男は舌打ちした。二時間で読めるようなホラー小説かなんかがあればいいのだが、中にはアガサ・クリステイのミステリーが山のように入っているだけだ。下のほうにはコナン・ドイルの本やアラン・ポーもある。どれも古臭い本ばかりだ。義男の興味対象ではなかった。義男は引き出しをしめた。四段目の一番大きな引き出しを開けた。

そこには漫画本が引き出しいっぱいに入っていた。なるほど、これだけあれば暇つぶしにはなるに違いない。いずれも真新しい本ばかりで、現在、週刊誌で連載されているものばかりだった。義男はその中から一冊を選び、（それは好きなシリーズの最新刊だった）ベッドの上で読み始めた。一冊読むのに三十分ほどかかった。義男はそれを戻し、別の漫画を探した。好きな週刊誌に載っている漫画本が多く揃っているのは嬉しかった。二冊目を手に取り、ベッドに横になるとノックがした。

義男はベッドから離れ、扉を開けた。扉の向こうで、沙智子が立っていた。

「どうしたの？」義男は思わぬ来客に喜んだ。

「部屋にいても落ち着かなくて」沙智子は床に目を向けて言った。

「とりあえず入ってよ」義男は沙智子を部屋に招いた。

義男は机の椅子に沙智子を座らせ、自分はベッドの上に座った。

「部屋の引き出しは開けてみた？」

「ええ、だけどこんなときにはどうでもいいものばかりで」

義男はうなずいた。そしてこんなときでも漫画本を読んで楽しん

でいた自分は少しおかしいのかなと考えた。

「一人でいると落ち着かないんです。というよりも、大体、こんな部屋にいて何になるっていうんですか。早くここから出る方法を探さなくちゃいけないんじゃないですか」沙智子はどことなく責めるように言った。

「そうだけどさ」確かにそうだ、義男はうつかりこんなところでのんびりしていた自分を恥じた。

「廊下の奥に言ってみませんか？ たぶん、他の人たちも同じ事を考えていると思うんだけど」

「でもあの扉は閉まっているじゃないか」

「部屋に戻ると引き出しの上にこんなのが置いてあったんです」

沙智子は銀色のものを義男に手渡した。それは鍵だった。

「扉は開きましたよ」沙智子は軽く微笑を浮かべた。「一人じゃ怖いで、一緒にいってくれませんか？」

「いいよ、いこう」義男は即答した。だが果たして扉の向こうにいたとして、それが出口へとつながることになるのかどうか、義男には疑問だった。準備するものなど何もないので、義男はそのまま外に出た。

五

廊下を少し進むと扉が見えてきた。開けようと試みるも扉は閉まっている。

「ところで食事は食べた？」

「一応。あんまり食欲がなかったら残しちゃったけど」

「そっか」女の子はデリケートだなと義男は改めて思った。それとも普通に弁当を食べた自分は少しおかしいのだろうか。

扉の前に来た。開かなかった扉は簡単に開き、義男と沙智子はその向こうに出た。

義男は割合広い場所だなと思った。天井も壁も丸みを帯びていて卵型の形をした場所で、あらゆる方向に、正確に言くと八方にアーチ型の通路があり、それぞれかなりの奥行きを見せていた。壁は銀色だった。

義男は戸惑った。こんなにも進む先があると、どこへいったいいのやらさっぱりわからないし、無闇に進んで迷ってしまうのは怖かった。

「すごいね」義男は沙智子に向かっていった。

「すごいでしょ」沙智子の義男の反応を面白がっているようだった。義男は首を動かして見返し、それから沙智子に手で、ここで待てという指示を出し、とにかくアーチ型の通路の一つを進んでみることにした。八方の中から一つを選んだ。一番右から二番目の通路。

右斜めの方向へ進んでいく。通路は狭いが、別に歩くのに支障はない。義男は時々後ろを振り返りながら進み、沙智子がこちらの背中を見守っているのを確認した。彼女の顔の表情がわからないほどの位置までくると、直進と左右に通路が分かれた場所に出た。そしてどの道も途中で右に湾曲していて先が見えなかった。義男は左に進んでみた。右に曲がりだし、それからすぐに四方に分岐した場所に出た。左、斜め左、直進、斜め右の四方向だ。何がなんだかわから

ない。義男はもうこれ以上進んでみる気にはなれなかった。義男は来た道を引き返した。大した進んだわけではないので、沙智子がすぐに見えたが、義男の頭の中は完全に混乱状態だった。

「どうでした？」戻ると、沙智子が尋ねてきた。

「うん。わけがわからないよ。ちよつと俺には無理みたい」

「やっぱり迷路みたいになっているんですか？」

「ごちゃごちゃの迷路だったよ。さ、戻ろう。これじゃ進めないよ」

義男は沙智子の返事も待たずに扉を開けて部屋に向かった。沙智子はしばらく考えごとをしているようにその場に立ち尽くしていたが、義男が呼びかけるとしぶしぶといった様子でついてきた。

「モニターではここが地下迷宮だといっていた。たぶん、あの扉から先が迷宮の始まりなんだ」

「地下迷宮」沙智子がつぶやいた。

「出るのはちよつと骨が折れそうだ」義男は言った。しかし、これだけでは沙智子を不安にさせるだけだと思いなおした。そして何かフォローをいれようとしたが、沙智子が義男の顔を見た。

「焦らずに探るように進めばそのうち外に出られるかもしれませんね」

「ああ、そうだね」義男はそう答えた。沙智子の顔には希望の色があった。何か思いついたのだろうか？

義男は自分の部屋の扉の前で立ち止まった。

「どうしよっか？」

「私は広場に行ってみます。他の人たちも困ったらあそこに集まるだろうと思うし」

「なるほど。俺もいくよ」

二人は廊下を進んだ。加藤老人の部屋の扉を通り過ぎるとき、足音を聞きつけたのか、扉が開いて加藤が出てきた。

「やあ、君たち。お散歩かい？」

二人は特に反応を示さなかった。

「冗談だ。広場にいくのかい？ 私もいこう」

「ここから出る方法でも考えついたんですか？」沙智子が聞く。
「いやあ、全くわからんよ。しかしみんなに見せたいものがある
ね」

六

三人は広場に向かった。扉を開けると、四人の姿があつた。横井勉と富士野満雄、水野瑠美子。それに先ほど老婆と小柄な男。全員揃っているようだ。老婆は瑠美子と話し合い、楽しそうにしていた。しかし小柄な男のほうは難しそうな顔をして周りを睨みつけるようにして椅子に座っていた。

「もう迷路を試したのか？」満雄が義男を見て聞いてきた。

「迷路？」加藤もこちらを見る。

「鍵があつたんです」沙智子が答える。「それで、奥の扉を開けたんですけど、奥は道がいっぱいあつてすごい複雑になつてゐるんです」「こつちも同じだ」勉が言う。「あんなんじやとても進めねえよ」加藤がポケットから折りたたまれた紙を取り出した。「君たち、これを見てくれ」

「何それ？」瑠美子が言う。六人は加藤の周りに集まった。しかし、小柄な男だけが椅子に座つたままにいる。

「君も見てくださいか？」加藤が気づき、言った。

「俺も見たほうがいいのか？」男が胡散臭そうに聞き返した。

「この中にいる全員に関係があるだろう」

男は椅子から立ち上がつておずおずと近づいてきた。ぎこちない動作に満雄がクスリと笑うが、瑠美子に手で突かれて仕方なくやめた。

加藤はたたまれた紙を開いた。白い紙が開かれ、加藤はそれを見んなに見せた。一同はしばらく紙面に書かれた文字を読み続けた。

警告

夜の九時以降はなるべく、廊下をうろつかないこと。また、扉の鍵をかけておくこと。憩いの場にもいかないこと。夜の九時から

朝の六時まで、開かない扉が開かれる。嚴重注意！ 怪物は夜から朝方にかけてその本性を曝け出す。寂しさから、孤独を避けようとするのが一番危険だということを承知しておくように。

管理人より

「何だよ、これ」勉がつぶやく。

「これはどういう意味なのか、誰かわかる人はいるの？」老いた女が言った。

「私にもわからんが、上のモニターにも出てるだろ、怪物に注意と。怪物というのが一体なんなのかはさっぱりだけど」加藤が言う。

「わからないことだらけなのに、ますますわからなくなっちまった」満雄が言った。

「憩いの場っていうのはこのことだろうな」小柄な男が言った。

「とにかく、九時以降は部屋から離れるなってことだろ。わけがわからないけど、警告は素直に聞いたほうがいいかもしれない」

「うん、私も同意見だ」加藤は手紙をしまった。

義男は時計を見た。まだ二時だ。夜の九時といえばあと七時間もある。

「ところでお二人さんの名前はなんというのだね？」加藤が、老婆と小柄な男に聞いた。

「私は西岡です」老婆が答えた。

「沢登だ」男が小さく答えた。

「なるほど、私は加藤だ」加藤はうなずいた。「とにかく、これはみんなに見せるべきだと思って持ってきたんだ。それじゃ、私はまた失礼するよ。迷宮にも入ってみたいし。いや、私達はすでにその迷宮内に入って、閉じ込められているんだっただ」加藤は出て行った。

「おい、そっちは大丈夫なのか？」勉が義男に言った。

「何がです？」

「犬だよ」満雄が苦い顔をする。「迷路を進んでたらさ、やたらとおおきな犬がいたんだ。そいつがいきなり襲い掛かってきたもんだからさ、俺達は全速力で逃げたんだ。扉を閉めちまえばよかったんだけど、そんなこと考えてる余裕がなくてさ」

「それでここまで逃げてきたの。あんなのがいたら戻る気にもなれないしね」瑠美子が言う。

「向こうからも迷路につながってるんだろ？ 俺達もそっちへいこうよ」満雄が言う。

「それよりも何か武器があればいい。犬を追っ払えるようなさ」勉が言う。

「とにかくそっちのほうにいつてみようよ」瑠美子が言い、三人は義男たちがきた扉を入っていった。

「どうしよう？」義男が沙智子に聞いた。

「みんなでいったほうがいいかもしれないですね」

二人は三人の後を追うことにした。

「あたしもいつていいかしら？」西岡と名乗った老婆が尋ねてきた。「いいですよ」義男が答える。

三人は憩いの場を去り、奥の、迷路へと続く扉に向かった。扉はすでに開いていて、迷路の入り口に瑠美子と勉が立っていた。義男は足音を立てて彼らを振り向かせた。

「あんたらか」勉が言う。「今満雄が迷路を試してるんだ。そろそろ不安になって戻ってくると思うけど」

「これが迷路なの？」西岡が素っ頓狂な声を上げた。「何だかすごいところね」

「こっちも似たようなものだな、俺達のほうと」

「地図があればこんな苦労しなくてもいいのに」瑠美子が言う。「確かにそうだ」勉が同意した。

満雄が戻ってきた。ふつくらとしたその顔は笑っていた。

「何だ、何か収穫でもあったか？」勉が期待して聞く。

「俺、ドアを見つけたんだ」

「ドアを？」勉が聞く。

「ああ。だけど鍵がかかっているのか開かなかった」

「じゃ、そのドアの鍵を発見するしかないってわけだな」

「あまりに複雑すぎてさ。わけがわからなくなった。とにかく、進むには鍵が必要だ」

「こつちには犬はいないのか？」

満雄が苦い顔をした。「犬の毛らしいものが落ちてたよ。何か武器みたいなのがあればいいんだけど」

「そうだな、武器と、それに鍵か。見つけたらまた来よう」

「戻るわけ？ 犬はどうするの？」瑠美子が聞く。「まだ私達の部屋の前でうろついているかもしれないじゃん」

「ビール瓶でも投げつけてみるか」勉が提案した。

「いいかもしれないな」満雄が同意した。「犬一匹にいつまで脅えられっか」

三人は戻っていき、後に義男と沙智子それに西岡が残された。

「俺達も戻ろう」義男が提案した。

「でも、戻ったってここから出られるわけじゃない」沙智子が出た。

「あたしも戻ってみる。それじゃあね」

西岡が去っていった。彼女の香水の残り香が義男の鼻にまとわりついた。あまり好きな匂いというわけではないが、全く嫌いでもなかった。

「とにかく俺は戻るよ」

「私、ちよつと歩いてみます。奥に扉があるっていつでも、道はそれ一つだけではないんだから」

義男はどうすればいいか考えた。一緒にいくべきだろうか、しかし、二人でいって迷子になるのはまずい。

「一人じゃ危険だろ？」

「大丈夫」

「そっか。じゃあ、気をつけて」義男は少し躊躇した。このまま沙

智子一人に任せてもいいものだろうか。しかしまたあの迷路の中を進む気にはならなかった。沙智子の後姿を見守り、義男は部屋に戻った。

七

義男は部屋に戻るとすぐさま漫画本の続きに取り掛かった。漫画を読んでいるうちに迷路のことも、それに取り組んでいる沙智子のこととも忘れた。五冊ほど読んでいくうちに時間は進み、義男が漫画を読むのに疲れ飽きたころにはもう六時になっていた。時計を見て義男はあと二時間経たないと食事を摂れないということを考えた。腹はそれほど空いていなかったが、漫画を読むのも退屈になってきた。漫画を机の中にしまい、義男は部屋を出た。通路は静かだった。広場のほうに行ってみようかと考えたが、沙智子のことが気になったので迷路の入り口へと向かった。扉を開けて入り口に出る。八つの通路を見ると、うんざりした。

沙智子の姿は見えなかった。迷路の中で悪戦苦闘しているのか、それとももう自分の部屋に戻っているだろうか。義男はとりあえずその場で立ち止まって、自分も、もう一度迷路に挑戦してみようかと考えた。ここから抜け出すには迷路の中を進むしかないのなら、ここを進むほかはないのだろう。しかし満雄は鍵が必要だといっていたな。

この中のどれが出口へ通じているのだろう。義男は考えてみた。どれか一つが出口に通じるとして、どれかを適当に進んだとしても出口に当たる確率は十二、三パーセントくらいしかない。どれかを選んでも道順さえ正しければ最後には出口に通じるかもしれない。全ての通路がつながっている場合もある。

義人は右から三番目の通路を進んでみた。前の道はすぐに分岐点に出たが、この道は進めど進めど一本道で、十分歩いてようやく右か左に進める分岐点に出た。義男はこういとき人は無意識に左を選ぶ傾向にあるという左の法則を思い出した。義男はそれに反して右に進んだ。右の道は長く、そして単調だった。何度か引き返して部屋まで戻ろうかと考えたが、途中までくると引き返すのも面倒だと

感じた。とにかくひたすら進んでみた。ようやく通路が三叉に分かれた場所に出た。しかし、真ん中は少し歩くと行き止まりになっているし、左右の右の道は行き止まりになっていた。左に進むしかないだろうと義男は思い、左へ向かった。またもや単調な道だったが今度はすぐに左右の別れ道に出た。左右の道の右側には扉があった。左の道は右に湾曲して、その先はわからなかった。

義男は扉を発見して少し興奮していた。満雄が言っていた扉かどうかはわからなかったが、義男は扉の前に立ち、ノブを回してみた。おそらく開かないだろうと思っていた扉は簡単に開いた。軽く驚きながらも義男は扉をくぐった。扉の先は部屋になっていた。小さな部屋で四方を白い壁が囲んでいる。机が隅にぽつんと置かれていた。義男は机の前に立ち、色々と調べてみた。見たところ、何も無いようだった。義男は引き出しを開けてみた。一段目の引き出しを開くとさつそく何かが現れた。白い紙切れが一枚、置いてあった。義男はそれを手に取った。紙切れには何かが書かれてあった。義男は書かれた内容を見た。

恐怖の根源は自身の中にある。それを認めない限り、ミノタウルスはやってくる。

ミノタウルスという単語には義男は馴染みがあった。ゲームなどでよく出てくる、半人半牛の化け物。有名なモンスターだ。ミノタウルスがやってくる。義男は背筋に戦慄が走るのを感じた。迷路の中を歩いているときに、牛の顔をした化け物が襲ってくる……それはとても非現実だが、実際にそんなことが起きたら卒倒ものだ。

この短い文章が何を意味しているのか全くわからない。とにかくこれはみんなに見せよう。義男は紙を折りたたみ、ポケットにしまった。そして二段目、三段目と引き出しを開けるか、もう何も出

てこない。ここにはもう他に何もないようだとなり、義男は部屋から出ようとした。そして彼は小さな悲鳴を上げた。扉だった。扉には扉全体を占めるように牛の顔が描かれていた。牛の頭はデフォルメされていて、まるで悪魔のように見えた。睨み付ける目、その目から赤い血が流れ落ちていく。鼻輪をつけた鼻、そして異様に大きな歯が生えている口からは人間の手が見えている。その手はまるで、助けてくれといわんばかりに突き出ているように見えた。

「くだらない」冷静になると、義男はつぶやいた。慣れてしまえばその絵は荒々しい音楽バンドのCDジャケットの絵でしかない。義男は部屋を出て、扉を閉めた。それから義男はその場に立ち尽くし、次にどうするか考えた。左の湾曲した道を進もうかとも考えたが、そろそろ引き返すのが難しくなりそうだった。進んでみたい気持ちを押しのけて、義男はきた道を引き返し始めた。少し混乱したが、歩いてきた順路をなんとか思い出しながら歩くと、始めの場所まで戻ることができた。単調な通路が長かったためか、少し時間がかかった。義男は扉を開けて、自分の部屋に戻った。時刻を調べたかったのだ。時計を見ると、もう七時を回っていた。食事の時間までまだ一時間あるし、沙智子のことも気になったので義男は沙智子の部屋の前にいき、ノックをした。すぐに扉が開いて沙智子が現れた。

「義男さん」

「迷路、どうだった？」

沙智子の顔が輝いた。「色々みつけましたよ」

「見つけたって？」

沙智子は机の引き出しの一番上を開け、その中から一冊のノートを取り出した。そしてその最初のページを開いて義男に見せた。義男が見たのは手書きの地図だった。迷宮の地図だとはすぐにわかった。なるほど、沙智子は地図を作成するつもりだったのか。義男は感心し、なぜ自分は地図の作成ということを考えなかったのかと反省した。地図を入念に見てみる。最初の出発点から八つに分かれた道まで、細かく丁寧に描かれている。だがまだまだ白紙の部分が

多い。

「大したもんだ」

「だけどあの迷宮、思った以上に複雑です。本当にあそこから出口に辿り着くとしても、結構時間がかかるんじゃないかと思います」

「ま、根気よくやっていけばいいんじゃないかな。そうだ、俺もさつき迷宮に入ったんだ。そしてさ、扉を見つけてさ、その奥の小部屋でこれを見つけたんだ」義男は紙切れを沙智子に渡した。沙智子はすぐにそれを読み終え、首をかしげながら義男に返した。

「どういう意味です？」

「さあ、俺にもさっぱりわからない。意味なんてあるのかもわからない」

「それ、加藤さんに見せてみたらどうか。あの人なら何かわかるかも」

「そうかな、こんなもので何かを発見できる人はいないと思うけど」義男はそう言いつつも加藤にそれを見せてみようと思った。

「今からまた迷宮にいっためます」

「今から？ 一人で大丈夫かい？」

「怖くなったらすぐ戻ります」

義男は笑った。「それが一番だよ。そういえば、向こうの方から迷宮に入ることができるといつてったっけ。あっちとそっちとはつながってるのかな？」

「わからないけど、その可能性はあります。ここ、見てください」

沙智子はノートを指差した。「見ての通り、ここはもう入り口よりずっと南側にありますよね。扉に鍵がかかってたから、その先に進むことはできなかったんですけど、向こう側とつながっている可能性もあります」

「なるほどね」

「あ、そうだ」沙智子は二段目の引き出しを開けた。そしてそこから何かを取って義男に見せた。それは鍵と、ナイフだった。鍵は銅の鍵で倉庫などを施錠するとき用いるような大きな鍵だった。ナ

イフは、普通の果物ナイフではない。明らかに戦闘を意識して作られたような形状。サバイバルナイフの種類の中でも戦闘用に作られたもの、ファイティングナイフだ。どちらもほつそりとした小さな手をした沙智子がつけていても全く似合わない代物だった。

「それ、迷宮で見つけたの？」

「そう。この鍵は小部屋で見つけたんです。どこで使うのかはさっぱりですけど。こっちのナイフは別の小部屋で見つけたものです。ほら、ここここですね」沙智子は地図で小部屋的位置を義男に見せた。×印がついているのはもうここは確認済み、という意味だろうか。

「まだまだあの迷宮には色々なものが隠れているはずですよ」沙智子はいいい、鍵とナイフと地図を持って部屋を出た。義男も続いた。

「そのナイフも持ってくるの？」

「一応。護身用に」

「ま、狂犬が出るっていうから、用心に越したことはないよね」義男の頭の中で大きくて真っ黒な犬が出てきた。確かにそれは恐ろしい存在かもしれない。しかし……あの部屋を出て以来、義男の頭を離れないのは、牛頭の人間のイメージだった。裸の体に鬼のパンツのようなものを穿いている。そして、手には棍棒を持っている。鬼のイメージとかぶる、と義男は思った。鬼にも牛鬼という体が人で頭が牛という奇妙な鬼がいる。馬鬼という仲間もいた。馬面の頭をした鬼。

「どうかしました？」

沙智子の声で義男は我にかえった。沙智子が不思議そうな顔で義男を見つめていた。

「いや、ごめん。それじゃ、気をつけて。俺はちょっとジューズでも飲んでリラックスしてくるよ」

「何かあったら教えます」

「お願い」

沙智子は去っていった。背中越しから沙智子が迷宮内に赴くのを

心待ちにしているのが感じられる。地図の作成が楽しくて仕方がないのだろう。

女の子を一人で行かせていいものだろうか。義男はそう思いながらも、憩いの場へ向かった。

八

扉を開けると、予想通り、幾人か集まっていた。あの小柄な男と満雄以外は全員揃っているようだ。

「何かあったのか？」義男がくると加藤がすぐに椅子から立ち上がった。

「ええ」義男は紙切れを加藤に渡した。

「何か有用な情報でも書いてあるのかな」加藤が微笑んで紙切れを受け取った。加藤は紙切れを広げ、そこに書いてある文章を声に出して読み上げた。

「恐怖の根源は自身の中にある。それを認めない限り、ミノタウルスはやってくる」加藤は読み終わるとそれを義男に返した。

「迷宮の中で見つけたんです。何か意味があると思います？」

「ミノタウルスってクレタ島のあのミノタウルスよね？」西岡が言った。「テセウスとアリアドネのお話の」

「ラビリンス。ミノス王の迷宮」加藤が呟く。「つまりここが、この奥にある迷路をミノス王の迷宮と見立てている、ということかもしれない」

「じゃあ、あの迷路の中には半人半牛の化け物がうろついているっていうの？」西岡の顔がほころぶ。

「それはありえないだろう。だが何か、危ないものがうろついているという可能性はあるかも……しれないな」

「よしてよ、そんなの」瑠美子が顔を顰める。

「ただの牛が歩き回っているだけかもな、草を求めて」と勉。

「それならいいがな」加藤はそう言い、ポケットから義男が持ってきたのと似た紙切れを取り出した。「みんなにはもう見せたんだ」

義男は紙切れを受け取った。そして紙切れに書かれた文章を読んだ。

破滅から逃れる方法は二つある。

一つめはひたすら自身を抑える術を学ぶこと。

二つめは自身を解放させることだ。

「俺にはよくわからないです」義男は紙切れを返した。

「それがみんなの答えだ」加藤が言う。

「実は俺もあるんだ。誰か見たい人いるか？」勤が立ち上がり、パンツの尻ポケットから紙切れを一枚取り出した。義男は勤が左手にスイス製の赤いアーミーナイフを持っているのに気がついた。

勤は義男がナイフを見ていることに気づいた。「ああ、これ。迷路の中で見つけたんだ。十徳ナイフってやつ」

「どうして黙ってたの？」瑠美子が問う。「何かを見つけたなんて一言もいわなかったじゃない」

「ああ、忘れてたんだ」勤はさらりと答えた。「あんまり大したことじゃないと思ったから……満雄が欲しがるかもしれないし」

「いらねえよ」といいつつも満雄の目はナイフに釘付けた。

「その紙を見せてくれないか」加藤が言い、勤は加藤に紙切れを渡した。加藤の周りにみんなが群がった。

虎か羊か。見極めを誤らないこと。

「どうでもいいと思ったけど一応持ってきたんだ。どうでもいいと思いきり忘れてたよ」

「その十徳ナイフ、持っててなんか意味あるの？」瑠美子が聞く。

「何かと便利だと思うよ」そういった勤の顔は自信なさけだった。

「ミノタウルスカ。それに迷宮。一つの仮説が浮かんた」加藤が言

い出した。

「たぶん、私と同じ考えだと思うけど」西岡が言う。老女の目は加藤とあい、しばし二人は見つめあった。老女の目は輝きに満ちていて、皺だらけとはいえシミはほとんどなかった。義男は老女の目に知性のきらめきを感じた。しかしそれは加藤のほうにも感じ取れた。ただ、西岡のほうがより自信を持っている、というように見て取れた。目の輝きにそれが表れている。

「聞かせてくれ」加藤が言った。

「私達は誰かに遊ばれている。これはたぶんみんな思ったことよね？」

「そうだな」加藤は不愉快そうな顔つきをした。「私達は遊ばれている。私達を拉致した者たち　それが何者かはわからないが、この迷宮内に連れ込み、そして迷路をさまよわせる。そしてそれを監視カメラが何かで観察し、高みの見物を決め込んでいるのだ。私達を酒の肴にしているのか、何かの実験に使っているのかはさっぱりわからん。とにかく我々は玩具か、あるいはマウスのような存在になっちゃった。ただ迷路をさまよわせるだけでは緊張感がないので、ミノタウルスという架空の存在があたかもいるかのように思わせて、私達の慌てぶりを楽しむつもりだ」

「でもそれは最初に私も考えたの」瑠美子が言った。「何かのゲームか、実験材料なんだろうってのはね。なんか映画とかでこんなシチュエーションありそうじゃない？」

「あたしの考えた仮設はね」西岡が瑠美子を見つめて言う。「加藤さんが言ったのとはほとんど同じだけど、一つだけ違うところがあるの。ミノタウルス。ミノタウルスは恐怖を付加させるための演出として存在するかもしれないし、そう匂わせているだけかもしれないとも思ったの。でもね、ええと、あなたなんて名前なの？」

西岡は義男のほうを見た。

「田辺です」

「田辺君が持ってきたのと、横井君が持ってきたのも似たようなこ

とが書いてある。これは明らかに忠告だと思うの。ミノタウルスはやってくる。これは私たちを監視している者がミノタウルスだということを書いてあるのと思うの」

「ミノタウルスとは監視者のことで、ミノタウルスがやってくるというのは監視者が我々に厳罰を与えるためにこちらに姿を見せる、ということをお願いしたいわけかな？　あるいは監視者が雇った残忍な連中だということにしてもいいが」加藤が言った。加藤の指摘に西岡は笑みを浮かべて見せた。

「そうよ。監視者がミノタウルスで、厳罰を与えにやってくる。そうじゃない？」

義男はなんだか拍子抜けしてしまった。これは所詮、机上の空論でしかない。二人の老人が言い争っても答えが出るはずがない。何か、確実にそうなのであろう、と思わせる意見があればいいのだが。

「紙切れの文章で肝心なのはミノタウルスの正体ではないはずだ。たとえばこれが忠告だとしても、我々の中でこの忠告を受けて、それを理解できる者がいるかな？」

「今の段階では誰にもそれを証明することはできないはずでしょ」瑠美子が言った。「もっと迷宮を探れば、情報がどんどん増えていくと思うけど」

「確かにそうだ。今の時点で色々意見を言っても仕方ないかもしれない」加藤は大きく息を吐いた。「それじゃ、私はそろそろお暇するでしょう」加藤は立ち上がった。義男も加藤と一緒にこの場を去ることにした。

「もう遅いし、自分の部屋に戻ったほうがいいかもね。ほら、九時以降は気をつけろっていうことだったしね」西岡が言った。

義男は時計を見た。もう八時を回っている。

「俺も帰ります。また紙切れが手に入ったら持って来ます」義男は言った。

「これだけの人数が探すんだ。いくら長い迷路でもすぐに出口なん

て見つかるよな？」勤が言う。

「だといいけどね」瑠美子が返す。全員、その場から離れ、自室に戻る雰囲気になった。加藤が扉を開けた。

「それではまた、明日。全員が明日まで無事でいることを願っているよ」

「脅かさないでよ」瑠美子が言った。

加藤は笑った。義男は加藤について通路を歩いた。加藤は自分の部屋の前で止まった。

「九時以降は外に出ないようにしたほうがいい。一応な」

「わかってます」

「ではおやすみ」

加藤は扉の中に入っていった。沙智子はどうしているだろうか。義男は気になったが、自分の部屋に戻り、扉をロックし、用意されてあった食事。生暖かいナポリタンとサラダ、それに茸の入ったスープを平らげた。それから漫画本を読もうとしたが、うとうとと眠くなってきた。なので布団に横になり、それからすぐに眠りについた。意識が薄れ、無防備になることの不安はなかった。

九

義男が目覚めると、電気が消えていて暗かった。義男は暗闇が怖かったのですねに電気をつけようと起き上がった。視界が黒一色で本当の意味で真っ暗だった。電気をつけると明るくなり、時計の時間が見えた。六時半だ。睡眠時間は十分だったようで、寝起きで頭が鈍っているとはいえ、調子はよかった。義男はベッドを見た。一瞬、これが自分の部屋のベッドだと思った。自分の部屋なら、ベッドの少し上の高さに窓があり、大抵はカーテンが中途半端に閉じていて、この時刻ならうつすらと朝の光が漏れているはずだ。その光が机に反射する。どこか寂しい光景。だがこの殺風景すぎる所よりましかもしれない。ここには窓もないし、朝日も、微風も入ってこないのだ。しかしここにいれば仕事にいく必要はない。仕事の苦痛を感じることはないし、他の色々な問題にも関わらずにすむ。

義男は首を振った。こんなことを考えるのはまともではない。他のみんなだって、一刻も早くここから出たいと思っているはずだ。他の連中は何をしているだろう。まだ寝ているだろうか。沙智子のこと頭が浮かんだ。なんとなく、彼女はこの時間にもう迷宮を探索しているような気がした。義男は部屋を出ようと思ったが、その前にトイレに入って小用を足した。終わるとトイレを出て、扉を開けて廊下に出た。廊下はしんと静まり返っているが、電気はついていて。扉を背にして左に進み、迷宮へ続く扉を開いた。八つのアーチ型の通路を見ると頭が痛くなりそうだった。昨日どの通路を進んだのか義男は思い出し、今日はどこの通路を進んでみるか、どの通路を進むことに決めるかと義男は考えた。

しかし、考えてみればいきなりこの迷路を試すことはないのではないだろうかと思い直した。沙智子も地図を作成しながら進んでいる。こちらがやることはそれを黙って待つことだけだと義男は考えた。時間はたっぷりあるし、暇つぶしに探索するのも悪くないな

と思い直した。

義男は一番左から二番目の道を進むことにした。沙智子はこの道を通っただろうかと考えながら歩いていくと、大きく左に折れ曲がる道に出た。左に曲がると今度は道幅が広くなり、進んでいくことに段々と狭くなっていた。壁は銀ではなく、白い壁に変わり、それから黒と白の市松模様に変わった。床も天井も黒と白に変わり、義男は思わず目をしばたいた。だがこちらのほうが銀の壁よりも殺風景じゃないからだろうか、義男はなんとなく心が落ち着いた。一本道は長く、義男がだれてくると終わりになり、行き止まりに黒い扉があった。ノブを回し、扉の中に入る。昨日の経験から小部屋に通じているだろうと思われたが、そこはまたもや通路で、目の前に四つの横に並んだ道があり、どの道を見ても似たような一本道が続いている。面倒になってきた。今度こそ道に迷うかもしれない。だがこのまま収穫もなく引き下がるのもいやだった。義男は一番右から二番目を選んで進んだ。一本道をだらだらと進み、それから右に折れ、少し進み、左に折れる。まっすぐ進む。通路は広くなったが、少し照明が薄暗くなった。やがて市松模様でもなくなり、銀色の壁に戻った。義男は不安を覚えた。かなりきてしまったが、まだ迷うほど道を選択したわけではない。構わずに進む。途中で右側の壁に大きな赤い扉があるのを発見したが、扉の取つてがどこにもなく、押してもびくともしなかった。かなりの大きさと、鉈が無数に打つてあった。まるで地獄の入り口へと続く扉みたいだと義男は思った。その扉を開けるのを諦め、先を進むことにした。内心、ほっとしていた。なんだか恐ろしい光景を見ることになるのではないかと思っただからだ。少し進むと左に折れ曲がり、折れ、まっすぐ進むと突き当たりに扉があった。ノブを回すと、見慣れた通路に出た。

義男は一回りして迷路から戻ってしまったのだと思った。ここは義男や沙智子の部屋がある通路とそっくりだった。だが扉の配置が少し違う。ではここはどこだろう。扉はいくつかあるが、義男は奥へ進んでみた。突き当たりに扉があったので開けてみると義男はこ

ここがどこなのか理解した。

目の前には迷路の入り口と全く同じ光景があった。八つの通り道。義男はすぐにそこを出て、通路に戻ると反対側に進んだ。そして突き当たりの扉を開けた。

「やっぱり」

そこは憩いの場だった。

「何でそこから出てくるんだよ？」椅子に座っていた勤が立ち上がって驚いた顔をしている。見ると全員揃っていた。時刻は七時四十五分だった。一時間以上も迷宮にいたようだ。

義男は先ほどの迷路の経験を七人に話した。

「つながっているのか」加藤が言った。

「犬に襲われなかったのか？ 昨日は散々だったんだ」満雄が苦い顔をする。

「なににせよ、無事でよかったわね。収穫もあったみたいだし」西岡が言った。

義男は椅子に腰掛けた。沙智子が隣にいた。顔を見ると朝の挨拶をしてくれた。朝の沙智子は少し髪が乱れていたが昨日とさほど変わらなかった。目に隈がないところを見るとよく眠れたようだ。

「鍵がかかっているのか、開かない扉が結構あるみたいですね」義男は言った。

「そう、そういうの結構あった。でも鍵は結構見つけたんだ」瑠美子が手のひらを見せ、銀色の鍵を三つ一同に見せた。「鍵穴が一致するのがなかなかないんだよね」

加藤が立ち上がり、瑠美子の手のひらの鍵をまじまじと見た。

「ここに数字が書かれているな」加藤が鍵を指差した。

「そうなの」瑠美子が応じた。「これは十一。こっちは十六、こっちは十九」

「それ、扉の番号と一致すれば開くってことかもしれません」沙智子が立ち上がり、義男に見せた地図の描かれたノートを瑠美子に見せた。「扉の右上によく見ると小さく数字が書いてあったんです」

義男も沙智子の地図を見てみた。なるほど、地図の中には扉を示していると思われるDの字の右上に小さく数字が書かれてあった。Dの字は色が分かれていて、おそらく扉の色によってペンの色を合わせたのだと思われる。

「地図つてどれ見せてよ……うわ、びっしりだね。あんた結構行動力あるね」瑠美子が感心したように言う。

「ここの扉が十一と書いてあるな」加藤が言った。「十一番の鍵がある。早速試してみては？」

「右上に書いてあるなんて気がつかなかったな」瑠美子はそう言うてから顔を渋めた。「でも犬に遭いたくないし」

「あの狂犬共、かなりしつこいぜ」勤が言った。「まあいいや。俺朝飯食べたらちよつと迷路に入ってみる。今度こそ仕留めてやる」

「殺すの？」瑠美子が言った。

「やらなきゃ、やられるんだ」満雄が危ない目つきで言った。「さあ、飯にしよう。もう時間だろ？」

満雄と勤、瑠美子は立ち上がり、この場を去った。義男も腹が減ってきたので立ち上がった。

「私達は少しここで雑談でもしているかな」加藤が言った。

「まあねえ、色々話すことはありますもの」西岡が微笑んで言う。

のんびりしているな、義男は思った。まるで子供たちの行動を見守る夫婦みたいだ。

「ごゆっくり」義男はそう言って憩いの場を去った。振り向くと沙智子が後ろにいた。

「今日も迷路の中に入るの？」

「うん。早くここから出たいですから」

二人はそれぞれ自分の部屋に戻った。食事を終わると義男は再び迷宮に戻ることにした。漫画を読んでいるだけでは必死で脱出口を探す沙智子に申し訳がないと思った。それに義男も早くここから出て行きたかった。廊下に出ると沙智子にばったり出くわした。沙智子は右手にノート、そして左手に鍵束を持っている。

「その鍵束、どうしたの？」

「机の中に入ってたんです。昨日はこんなの入ってなかったんですけどね」

きつと監視者だと義男は思った。この迷宮に自分達を連れてきた連中は、こちらが出歩いていることを確認するとどこからか部屋に侵入するのだ。あるいは部屋のどこかに隠し扉が何かあるのだろうか？

「見張っている奴がいるってことだろうね」

「そうだと思います。怖いですね」

「怖いね。ねえ、今から迷宮にいくんだろ、俺も一緒にいいかな？」

「いいですよ。二人のほうが心強いですし」

「それじゃいこう。ところで犬に追いかけられたりした？」

「まだないです」

「何か武器があればいいんだけどな」

「これがあるけど」沙智子はスカートのポケットからナイフを取り出した。昨日見せてくれたファイティングナイフ。沙智子はそれを義男に手渡した。

「これでやつつけろって？ 結構怖いな沙智子ちゃんは」義男は笑いながらナイフを眺めた。ナイフは魅了されるほどに美しく見えた。「万が一にと思って」沙智子は目の前の扉を開けた。八つの通路が二人を待っていた。「今朝はどの通路を進んだんですか？」

「一番左から二番目」

沙智子はノートを開いた。しばらくノートを食い入るように見続ける。「ここは通ったことがあります。市松模様になる通路ですね。黒い扉のあと正面に四つに分かれた通路があったと思うんですけど、どこを通りました?」

義男は今朝のことを必死で思い出してみた。しかし、どうも記憶が不鮮明だ。「よく覚えてないなあ」

「私、一番右と一番左は通ったんです。一番右は行き止まりで、一番左は小部屋に通じていました。小部屋は何もない、空っぽの白い空間でした」

義男は沙智子の地図を眺めた。「じゃあ俺が進んだのは残り二つのどっちかってことだけど、確か右側だったな。一番右から二番目だと思う」

「そこは一本道だったんですか?」

「うん。だけど途中で大きな扉があったよ。右側に。だけど入れなかった」

「鍵がかかっていた?」

「いや、鍵穴はなかった。というよりも取っ手がなかったんだ」

「ノブがない? それじゃ、どうしようもないですね」

「たぶん」

沙智子はノートを見つめ、それから一番右側の通りを見た。「ここにはまだ入ったことがないんです。いつてみます?」

「俺はどこでも構わないよ」

沙智子は一番右側の通路を進み、義男もその後を追った。道は左右に曲がっていて、進むのに苦労した。沙智子は立ち止まってはノートに通路を書き込んでいった。義男は軽く、散歩のような気持ちで沙智子の後をついていった。地図は沙智子がつてくれるし、歸りに迷うことはない。そう思うと気が楽だった。ただ、あまりにも沙智子任せにすぎても暇なので、何か自分が役に立つ場面があればいいなと想像してみた。化け物に襲われそうなところを助ける。闘いは男の役目。化け物といえばミノタウルスだ。加藤か西岡が言

っていた、何とか島のミノタウルス。

「ミノタウルスって、沙智子ちゃんの前から知ってた？」義男は沙智子の背中に話しかけた。沙智子が立ち止まった。

「半人半牛の化け物ってことしか知らないですよ」沙智子はそういうとまた歩き出した。

義男は沙智子の背中を見て、沙智子を怖がらせてしまったようだと思った。

「そんなのが本当にいるわけないよな」義男は言う。

「そりやそうですよ」沙智子は軽く笑ったようだが、おそらく引きつった顔をしているだろうと予想できた。

「だけど、あの紙切れの内容は気にならない？」

「ええ。だけど、私にはさっぱりわかりません」

「俺もだ。さっぱりわからない」

二人はそれから黙って歩き続けた。義男はミノタウルスについて、あの紙切れの内容について沙智子の意見を聞きたかったが、迷路内を歩いているときにこんな恐ろしい化け物の話題をするものではなかったと後悔した。

幾度か分かれ道があり、適当に選んで奥へと向かっていくと、二人は袋小路に辿り着き、途方にくれた。と、いうのも、長い一本道を進み、それから右折した途端にこれだったからだ。戻るしかないが、面倒な作業だった。

「この迷路は相当な広さに違いないね。一キロほど歩いたような気がするよ」

「五百メートルほどだと思います。往復で一キロ。」沙智子は弱々しい笑みを浮かべた。

「とにかくさ、戻るしかないんじゃないかな」

義男が言っていると、沙智子はうなずいたが、何故か動こうとはせず、壁を見ていた。

「どうかした？」不思議に思い、義男は尋ねた。

「ここの壁、色が少し違いますね」

義男は突き当たりの壁を眺め、確かに左右の真つ白の壁より少し黄がかかっている、というのに気づいた。しかし、それが何だというのだろうか。

「確かに少し黄色っぽいけど、別に大したことじゃないと思うな」

沙智子は義男の意見を無視して、壁を触り、それから強く押し、それから叩き始めた。だんだんと強く叩き、それが済むと今度は全力で押し出した。

「無駄だと思うけどな。隠し扉か何かだと思ってる？」

沙智子はとうとう諦めた。少し息が上がっている。無駄な頑張りをしている沙智子が義男にはなんだか可愛く思えた。

「さあ、戻ろう」義男は優しく言った。

「なんか引つかかったんだけどな、ごめんなさい」

「まあ、色々試すのは悪くないと思うよ」

二人は通路を引き返えそうとした。沙智子が時々後ろを振り返る。直線通路の終わり近くになると沙智子はまた振り返った。

「そんなに気になる？」

「なんだか、変な音が聞こえたような気がする」

「音？ 聞こえなかったけどな、別に」

「本当に、かすかに聞こえたただけなんだけど」

義男はかなり遠くに見える壁を見つめた。そのとき、激しい音が聞こえてきた。二人は驚いて竦みあがった。音は壁のほうから聞こえてきた。何が起こったのかはすぐにわかった。壁の扉が壊され、何か大きな獣が現れたのだ。二人は遠くにいながらもその獣が何だかわかったような気がした。黄色い毛皮に、黒の縞がある。犬よりも遙かに巨体。

義男は目を疑った。それは虎だった。

沙智子が悲鳴を上げると義男はすぐに我にかえた。義男は沙智子の手を取って曲がり角を曲がり、それからもう滅茶苦茶に通路を走りまわった。どこを通れば入り口に戻れるかなんてわからない。目の前の道をひたすら走った。

加藤は迷宮をひたすら歩いていた。記憶力には自信がある加藤はかなり奥深く足を運んでしまったとはいえ、入り口まで戻ることはわけではないことだった。手には果物ナイフと、それに安物のエアーガン。あまり使い道のなさそうなエアーガンは捨ててしまおうかとも思ったが、せっかく小部屋で手に入れた代物だと持ち歩くことにした。これだけ武器類が多いのは満雄たち若者が遭遇した大型の犬の対策のためだろうか。たかが犬じゃないか。何も殺すことはないのではとも思うが。

しかし、戦闘用に訓練された犬ならば手ごわいかもしれない。訓練されたドーベルマンなどがいたらかなりの脅威となりえる。もしそんなのと出くわしたら、果物ナイフで立ち向かうことができるかどうか。加藤は先へ進むのをためらった。それから、試しにエアーガンの威力を試してみることにした。考えようによってはいい威嚇射撃として使えるではないか。加藤はエアーガンを構え、壁に向かって発射した。発射音は意外に大きく、そして壁に弾が当たる激しい音。加藤はもう一発撃った。さらにもう一発。加藤はエアーガンの煙の吹き出ている銃口を眺め、これは予想以上の武器になるのではないかと思った。加藤はもう怖いものなしだと思って、先を進んだ。

いきなり曲がり角から犬が一匹現れたので加藤は少し驚いた。白と灰色が混ざった毛色の犬。いや、加藤は気づいた。大きすぎる。これは犬ではない。おそらく狼だ。狼は加藤を見つめ、それからじりじりと近づいてきた。加藤はエアーガンの銃口を狼に向けた。早速この銃を使う機会が得られた。加藤は引き金を引く前に、もしもこの狼が訓練された狼であつたらどうしようかと考えた。BB弾は狼には当たらず、壁に当たった。狼は何の動揺もせずに加藤に近づいてきた。

「くそっ」加藤はさらに撃ち、続けざまにもう二発撃った。なんだか情けなくなつた。これは所詮、玩具の銃と玩具の銃弾なのだ。しかし一発だけ狼に当たつた。狼の動きが止まつた。しかし、狼に怪我はなさそうに見えた。毛皮に覆われた動物には通用しないのだからかと加藤は考えた。狼は加藤に飛び掛つてきた。加藤はエアークンを犬に放り投げた。犬には当たらなかつた。狼は躊躇なく加藤に飛び掛つてきた。加藤は狼に押し倒された。狼が馬乗りになり、加藤の喉元を狙つてきた。この狼は間違いなく訓練されていると加藤は確信した。加藤は必死に狼の牙から逃れようとするが、狼の力は尋常ではなかつた。加藤は体を横にして、狼を下敷きにした。狼はもがき、加藤から離れた。加藤はそのまま狼の首を絞めるつもりでいたが、失敗だつた。狼はすかさず再び飛び掛つてくる。加藤が起き上がる前に狼は加藤の喉下を狙つてきた。恐怖が薄らいでいく。代わりに湧いてきたのは怒りの感情だつた。畜生なんぞに六十余年生きた歳月を終わりにされてたまるか。加藤は狼の喉元を掴み、渾身の力で締め付けた。狼の首は太く、毛皮のせいで思うようにはいかなかつたが、狼が加藤を襲うのを中断し、後退した。加藤は素早く立ち上がった。狼は加藤が強敵だとわかつたのか、しばらく攻撃するのをためらっているようだったが、再び襲い掛かる態勢に入つた。狼が飛び掛つてくる。加藤はナイフを構え、そして狼の喉元に切りかかつた。狼の泣き叫ぶ声が出た。そして、狼は喉から血を出して倒れた。

加藤はナイフを落として息をついた。狼を見ると、もう虫の息だつた。自分を殺そうとした相手だが、命の灯火が消えかけた獣を見ると、哀れみがこみ上げてきた。加藤は狼の前に腰を屈めた。息が弱々しくなり、やがて死んだ。生気のなくなつた目はただのガラス玉のように見えた。加藤は立ち上がった。こんなことをしなくてはならなかつたのは全てここに連れてきた者達のせいだ。何者なのかはわからないが、何故こんなことをさせるのだろう、遊びにしても何かの実験にしてもあまりにも酷すぎる。加藤はナイフを拾つた。

血のついたナイフは捨ててしまいたいが、再びこんなことが起こる可能性は高い。空気銃はどうしようかと加藤は悩んだ。全く役に立たなかったわけだが。一応捨ておくことにした。勤にあげれば喜ぶかもしれない。

狼の死体をそのままにして、加藤は再び歩き出した。こんな障害があるのなら、この先には何か重要なものがあるかもしれない。歩き始めると加藤は自身の中に眠っていた、怒りが再び表面に現れたことに気づいて立ち止まった。必死だったとはいえ、もう長い間の感覚はなかった。というよりも、長く封印していたのだ。これは普通の怒りの感情ではない。醜い憎悪の感情だった。加藤は自分の中にあるその感情を恥じていた。

「もう終わったことだ」加藤は自分がそうつぶやいたことにも気づいていなかった。加藤は自分の手を見た。それから、首を振ると再び歩き出した。

単調な通路はそういう仕様なのか、だんだんと照明が暗くなっていった。加藤は段々と不安になっていった。こちらを脅えさせるのが狙いなら、その目論見は成功だな、と加藤は思った。照明は完全には暗くならないものの、暗い通路は薄気味が悪く、加藤は進むのを躊躇った。それでも進んだ。不安は大きくなるが、逆に好奇心は強くなった。一体この先に何があるのだろう。加藤は十分に警戒し、それでも毅然とした態度で歩いた。どこからか何かが見えているとしたら、こちらがこそそそした歩き方を見て笑い転げているかもしれないと思つて。

通路の先に扉が見え、そして加藤は扉を開けた。奥には予想通り小部屋があったが、今までの小部屋と違って白い壁でなく黒で、机はなかった。奥の壁には鏡が一枚あった。前進が見えるほど縦に長い鏡だ。そこに映し出されたのは加藤の全身で、加藤は自分の姿を見て、血が服に飛び散っている。気がつかなかった。気持ちが悪いは思わなかった。不可抗力とはいえ、動物を殺してしまったのだ。こういった痕が残っているほうがよりその事を忘れないで済む。

だが……加藤は思った。一体全体なんで鏡なんかを？ 加藤は壁の右側を見た。赤い文字で何か書かれてある。

鏡は醜さも映す

何だか格言のようだと加藤は思った。それから、いらただしげに髪を掻いた。そして部屋を出ると、目の前の壁を蹴った。大した音はしなかった。足の爪先が痛んだ。

「一体何がしたいんだ！」加藤は天井を見上げて叫んだ。それから、ため息をついた。加藤は道を戻り、明るい場所に戻った。加藤はそこで面食らってしまった。犬の死体も、血の痕もどこにもない。加藤はすぐにその不思議に対する結論を頭の中で考え出した。なるほどと加藤は自己解決し、それから通路を戻り、迷宮の入り口に戻ると振り返って八つの通路の、自分が通った通路を見つめた。自分の記憶力に感心しながら、自分の部屋に戻った。昼食が用意されていたのでそれを平らげ、それから少し眠ることにした。今はとにかく頭を落ち着けることが肝要。彼はそう思い、ベッドに横になり目を閉じ、無理やり眠りについた。

全速力で走り、いくつかの道を適当に進んだがそれでも虎はついてきた。背後で爪が床に当たる音が聞こえる。義男と沙智子の体力は限界近くまで来ていたが、走るのをやめるわけにはいかなかった。だがとうとう沙智子が限界を超え、走るのをやめて苦しそうに胸を抑えた。無理もない、全力疾走なんてすぐに体力が尽きるものだ。義男は走って逃げるのは無理だと観念した。虎が通路に現れた。虎の息はほとんど乱れていないようだ。じりじりと義男たちのにじりよってくる。

義男はナイフを右手に構えた。いざとなったらこれで対抗するしかないだろう、とは考えていたが、実際に虎を近場で見ると、どう考えても戦える相手ではないと思えてしまう。

「義男さん、こっち！」沙智子が義男の背後で叫んでいる。振り向くと壁にある赤いボタンを押そうとしている沙智子の姿が目に入った。義男はわけがわからずに沙智子のところまで急いだ。虎がスピードを上げた。

義男は赤いボタンの隣に猛獣対策、緊急時にと書いてあるのに気づいた。沙智子がボタンを押した。すると鉄格子が沙智子と義男の目の前に落ちてきた。鉄格子は通路を完全に遮断してしまった。

虎は恐ろしい形相で二人をにらみ付けると、諦めたのかすごすごと引き返していった。

引き際が早いなと義男は全身を震わせながらそう思った。そう訓練されてるのかもしれない。

沙智子はその場に倒れた。

「疲れた」と沙智子は言った。

義男も疲れきっていた。沙智子を見習い、その場に座り込み、壁に寄りかかった。ナイフを使うことにならなくてよかったと思った。きつと刺す前に噛み殺されていただろう。

「とにかく一度戻ろう」義男は言った。沙智子はなんとか起き上がった。二人は地図を頼りに迷宮の入り口へと戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5035y/>

ミノタウルス

2011年11月23日20時47分発行